
ぶによショート

ぶによ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶによシヨート

【Nコード】

N5866W

【作者名】

ぶによ

【あらすじ】

シヨートシヨートの短編集です。

各話に関連はありませんので、興味を持って頂きましたら適当にご覧ください。

円形脱毛（前書き）

あら筋〓会社の給湯室でのOL三人様の御様子。

円形脱毛

会社の給湯室で、三人の女子社員が顔を突き合わせていた。
ひとつ先輩の彼女がおもむろに腕を上げて言う。

「どう？ この脇」

「綺麗ですね。永久脱毛ですか？」

「違うわよ」

急に深刻そうになった顔が横に振られた。

「あんた達の仕事が遅いから、ストレスで円形脱毛症になっちゃったんじゃない！」

「へ？」

「そんなバカな……」

「どうしてくれるのよっ！」口を開けたまま立ち尽くす二人を前に、彼女の両手が顔を覆った。

「あ、あの……」

声を掛けようとしたが、彼女の肩はぷるぷると震えている。

どうしていいか分からず、困惑した後輩達は互いの顔を見合わせた。

……くくく。

堪え切れなくなったように笑い声を漏らした彼女が、ちよろつと舌を出した。

「……なーんちゃって。そんな事ある訳ないでしょ」

呆気にとられて沈黙した彼女達は、一転して手を叩きながらの大爆笑になった。

「ぎやははは」

「くっだらなーい」

「何言ってるのかって、思いましたよ」

今は就業時間中。

微かに耳についた品のない笑い声に、職場にいた彼は廊下の方にちらりと目をやってから、大きな溜息を吐いた。

キリキリと痛む胃の辺りを押さえ、心配そうに髪を撫で付ける。

本当に円形脱毛症になっていたのは、仕事もせずに遊んでいる彼女達の上司だった。

サプライズ誕生日（前書き）

あら筋!! 今年の誕生日はどんなサプライズが待っているんだろう？

サプライズ誕生日

「茜、聞いてよ」

やっぱり自慢話が始まった。

「彼ってば毎年私の誕生日にサプライズをくれるんだけど、今年のは飛びっ切りだから期待してくれって言っのよ」

紅茶をスプーンで掻き混ぜながら、亜希子は優越感丸出しで微笑みを浮かべる。

「相変わらず、あなたの彼ってマメなのね」

「でしょ？ そう思うでしょ？ だから言われた通り、明日は一日家で待ってるんだ」

「あらあら、ごちそう様」

気のない返事を返しても、彼女は一向に気にならない様子。それ所かその目はどこか遠くを見詰めている。

「早く明日にならないかなあ」

「……」

それだけの為に呼び出さないでよ。

口を尖らせながらも、茜は何も言わなかった。

……翌日。

朝も早くから起き出した亜希子は、わくわくしながら昼まで待った。

今日という日があと半分残っているのは分かっているが、どうにもお尻が落ち着かない。立っては座り、時計を見上げては携帯を確かめる。

突如閃いた亜希子は、アパートのドアを開けて外に顔を突き出した。

でも左右を見ても、廊下にプレゼントの類は置かれていない。

「まだかあ……」

ついでに郵便受けを覗いて部屋に戻ろうとすると、チラシに混じって一通の封書が届いているのが見えた。

「これかな？」期待を込めて手を伸ばす。

「なんだ、披露宴の招待状か……」

最近、近しい人のそんな話を耳にした覚えはない。

「誰が結婚するの？」

裏を返すと、そこには彼と茜の名前が並んでいた。

ノマンの正体（前書き）

あら筋〓決して首を縦には振らない彼相手に飲む酒はうまい。

NOマンの正体

「おいつ、俺の酒が呑めねえっていうのか？」

ゆっくりと首が横に振られる。

「よしよし。そうこなきやな。ま、ぐつといけや。

所で今日の部長の言い種をどう思うよ？ 俺を「ゴミ」呼ばわりしやがってよ。ノルマに届かなかったたつってもあと一件じゃねえかなあ？

あれ？ まさかお前までそんな風に思ってるんじゃないだろうな

……」

とんでもない。

「くー、泣けるねえ。そう言ってくれるのはお前だけだよ」

思わず抱き付くと、ガガガつと激しい音が鳴った。

「何だよ、俺に触られるのはイヤか？」

いえいえ。

「ちっ、涼しい顔しやがってよ」

手が触れて床にこぼれたビールを丁寧にハンカチで拭き終わると、
「さて、帰るとするか」と腰を上げようとする。

一体どこに帰るっていうのよ？

深夜、扇風機相手にくだを巻く夫の姿を、妻の悲しそうな目が見詰めていた。

「……ああ、もう家に着いたんだっけか」

……合掌。

陰影の哲学（前書き）

あら筋[〃]光が当たると影が出来る。それはなぜ？

陰影の哲学

「面白いよね、なんで光の反対側は黒くなるのかな？」

夕日に晒されて赤く染まった身体をくるりと回すと、影はいつまでも纏わり付いてくる。

” 何にでも光と影はある物なのさ”

「それって答えになってないじゃない」

” そうか？ ” 僅かな沈黙を挟んで言葉は続く。 ” じゃあ、さつき雄太が転んだお年寄りを助けてあげた時に、財布まで抜き取ったのはどうしてだい？ ”

「それは……痛そうにしてたからかわいそうだと思ったんだけど、つい、いつもの癖でさ……」

悪かったと思ってるんだよ。そう言いた気な雄太の口は語尾が掠れるように小さくなった。

” ね、君の中にもちゃんとあるでしょ？ 陰と陽。だから外見もそう見えてしまうのさ ”

分かったような、分からないような曖昧な顔で、雄太は自分の影を見詰めた。

絵日記は語る（前書き）

あら筋〃担任の先生に呼び出された高志は、提出した絵日記を見せられた。

絵日記は語る

「高志……くん、ここに書いた事は本当なの？」

担任の先生が夏休み明けに提出した絵日記のページを開いて指さした。

「うん」

「ウンじゃなくてハイって返事をしなさいって、いつも言ってるだろう？」

こんな時なのに、いつもの癖でつい叱ってしまう。

「で、提出前にご両親には見せなかったんだね？」

「はい」

「どうして？」

「それは……」口籠る高志は、顔を上げてこう続けた。「先生も誰にも言わないって約束してくれる？」

そんな風に言われれば、額かない訳にはいかなかった。渋々ながら顎を引いた。

「そりゃ、まあ、な……」

「じゃあ言うけど、ママに絶対内緒にしてくれてお願いされちゃったからさ、ここにだけ書く事にしたの」

「へえ……」なんて間が抜けてるんだ……。

” 八月二十日。お母さんがリコンとどけの紙をもらってきた。”

無邪気な顔を見れば、この紙がどういう意味を持つのか分かっていないのは明らかだったが、それでも言わずにはいられない。

「どうして教えてくれなかったんだよ？」

「ボク、何か悪い事したの？」

「なあ、高志。ママは他に何か言っていなかったか？ 新しいお父さんがいるとか、いないとか……」

「さあ？ ボク知らない」

「そうか……」

がつくりと頂垂れた担任の先生はボクのパパだった。

おねだりの光景（前書き）

あら筋々スーパーで駄々をこねるのは止めましょう。

おねだりの光景

二人がいるスーパーのお菓子売り場は、賑やかに声を上げる家族連れでこった返していた。

「ねえ、これ買っていい？」

腰を屈めたまま、健次が顔を上げた。

「ダメ」

「じゃあ、これは？」

「ダメ」

棚から取り出した商品を見せる度にダメ出しされる。

「何だよ、もう！ どれだったら買っていいんだよ！」

健次はお菓子を手にしたまま立ち上がると、母親に食って掛かった。

それでも買い物カゴを反対側に持ち替えながら、母は自分の買いたい物を素知らぬ顔で吟味している。

どうやら相手にするつもりはないらしく、こちらを見向きもしない。

「欲しい物があるんなら、自分で稼いで買いなさい」

「僕に働けって言うの？」

「そうよ」

隙あらばカゴにポテチを入れようとする手を叩きながら、呆れ顔の母はようやく顔を向けた。

「当たり前でしょ、もう三十なんだから」そう零しながら別の売り場に向かって歩き始める。「いい加減にしてよ、ホントに……」

ダイエット食品の怪（前書き）

あら筋々食べるだけで痩せるダイエット食品。売り出した社長の思惑は外れた。

ダイエット食品の怪

”あまり信じてなかったんですが、食べただけですっごい効果があつて驚いています。”

”本当にもう、みるみる痩せていくんです。ぜひ他の人にも勧めたいです。”

”五キロも体重が落ちました。もう手放せません。”

送られて来るのは感謝の手紙ばかり。苦情など一件もない。

おかしいな……。社長は戸惑いを隠せなかった。

中身は小麦粉に味を付けただけ……。はつきり言つてインチキだ。これは誰かに担がれているのかもしれない……。

事情を知っているのはここにいる社員だけ。僅か十人しかないオフィスを見渡しながら、彼は意図の分からぬ企みを見透かそうと目を細めた。

一体誰だ？

彼らの首を一人ずつ切つて、裏切り者を突き止めようと試みる。

しかし何も変わらない。変わらず嬉しい悲鳴は届き続けた。

残ったのは一蓮托生の親族だけになった。

おかしいな……。

彼は一時的に出荷を止めた。

電話が鳴り始めたは、その直後だった。

「次はいつ入荷するの？」甲高い声が引つ切り無しに受話器から飛び出してくる。

「一体どうなってるんだ、これは？」

製造を委託している工場が勝手に材料を変更し、いかさま商品が奇跡のダイエットフードに変貌した事を、彼はまだ知らない。

疑いを晴らせ（前書き）

あら筋々会社の機密書類が消えた。友人に掛かった嫌疑を晴らす為、僕は戦う。

疑いを晴らせ

会社の機密書類が消えた。

目線を上げると課長の手がひらひらと舞っているのが見えた。席を立て横に立つと、そのまま空いていた会議室に連れ込まれる。課長の一番のお気に入りである僕が、原の数少ない友人だと知っているからだ。

彼が疑われたのは、昨夜残業で最後まで残っていたからだという。誰の目も気にせずに書類を持ち出せたのは、彼しかないという事らしい。

まずは普段の彼を知る僕に、その印象を尋ねてきた。

「絶対原じゃありませんよ、そもそもそんな事をする理由がないじゃないですか！」

彼は穏やかな性格で、およそ背任行為に関わるとは思えない。

すると課長の目がキラリと光った。

「いや、噂じゃ大分借金で苦しんでるらしいぞ。換金目的かもしれないん」

「そうなんですか？」

「ギャンブルに嵌った挙句、何とかいうキャバ嬢にしこたま貢いでるって話した」

「あいつがそんな事を？ 信じられないな」

「しかも奥さんと協議離婚の真っ最中で、慰謝料の額で揉めるといっし」

「……それが理由だと？」

僕はしばらく立ち尽くして考えに耽った。

「それでも彼じゃないと思います」

「どうして君がそんな事を言い切れるんだ？」

「だって……」

犯人は僕だから。

髪の未来（前書き）

あら筋〃今日は娘の授業参観日。高橋は教室の後ろに貼り出されていた絵を見て落胆する。

髪の未来

今日は授業参観日。

高橋は夫婦で教室の後ろに並んでいた。

授業は国語。

「鈴木君はどう思うかな？」

「主人公が綺麗だからだと思います」立ち上がった彼はハキハキと回答する。

先生も気を遣っているのか、なるべく多くの生徒に答えさせようと質問を繰り返した。

もっとも生徒の為というよりは、来ている父兄の目を意識しての事かもしれない。

娘を見ると、顔を伏せたまま、なかなか手を上げようとしない。

元々勉強は苦手で、図工や音楽が大好きな子だ。いい所を見せたくても、苦手な教科ではそれも叶わないんだろう。

高橋が教室を振り返ると、後ろの壁にはたくさんの絵が貼っている。むしろこちらを見てやった方が娘は喜ぶかもしれないな。そう思いながら端から順に眺め始めた。

内容は様々だ。

SFに出てくるような高層都市。宇宙に浮かぶホテル。野球選手は自分の夢という所か。

で、肝心な娘の絵はどれだ？

絵の下に飛び出している名札を眺めていると、いつの間にかこちらを見ていた妻がそっと指をさした。

そこには男の人の顔のアップが描かれている。

「何だ、あれ？ 将来結婚する相手の顔か？」

それにしても妙に老けている。しかもどこかで見たような顔だった。

「違うわよ、タイトルを見て」

妻が笑いを堪えながら、囁くように言った。そこには”パパ”と書かれている。

「これが俺か？」

課題は”未来”。

そこにはすっかり前髪が後退して、頭頂部まで禿げ上がった自分の未来が描かれていた。

そうか、今の親父もこうだもんな。

しかし普通”未来”を描けと言われたら、自身の将来や環境を描く物だろう。なのに何で父親に恥をかかせるような絵を描くんか。ちよつと睨んでやると、こちらに気付いていた娘が慌てて顔を前に戻した。

今日は高橋の誕生日。

三人で一緒に手を繋いで帰る道すがら、娘がプレゼントをくれた。包装を解いて開けてみると、中身は育毛剤。

「やっぱパパはカツコよくなかった」

あの絵は髪に無頓着な自分に対する警告だったという訳か……。

「ずっと未来になってもね」

無邪気に笑い声を上げながら、娘は繋いだ手を大きく振った。

オレオレの俺（前書き）

あら筋々痴漢で捕まえた容疑者の自宅に電話掛けた。しかし相手は何か勘違いしているらしい。

オレオレの俺

ここは中央警察署、生活安全課。

「並木雄樹さんのお宅ですよね？」

「そうですけど……」

「失礼ですが、奥さんでしょうか？」

「はい」

「警察の者なんですが、実は彼が痴漢をしましてね……」

「夫が……？」

空白の時間から、彼女が絶句しているのが分かる。

「ええ、付きましては……」

言い掛けた言葉を突然彼女が遮った。

「いくらなら示談出来るんです？」なぜか彼女は笑いを堪えている。

「いや、それはちよつと……」

「またまたあ」

「本当にそういう事は出来ないんですよ」

「弁護士は登場しないの？」

「……」

なるほどな……。手口はテレビなんかで散々報道されている。心外ではある物の、一度思い込まれたら何を言っても納得して貰えそうにない気がした。

警官は送話口を手で塞ぐと、拘留している夫を電話口まで連れて来るように依頼する。

彼女を待たせながら、じきにやって来た容疑者に事情を話した警官は、持っていた受話器を差し出して言った。

「ちよつとあんたから奥さんに説明してやってよ」

「私ですか？」

「しょうがねえだろうが」

腰紐が結ばれたままの彼は仕方なく受話器を握り締めると、大き

く息を吸い込んだ。

「秋絵、すまん。つい出来心でやっちゃまったんだ」

「あなた誰？」

「オレオレ、俺だよ」

鉄壁の守り（前書き）

あら筋Ⅱ目の前で起きた大きな事故。タンクローリーから漏れ出した油に火が回った。（短編に掲載したのと同じ物です。）

鉄壁の守り

窓から外を見ると大きな火の玉が上がった所だった。

真っ赤なそれは急速に膨らみ、私の顔を真紅に染めながら、音も立てずにこちらへ向かってくる。

本能が逃げると言っていた。でももう間に合わないのは明らかだった。唯一出来たのは、その場にしゃがみ込む事だけだった。

おじいちゃんの家に取り取られたのは、私がまだ小学生の時だった。

両親が交通事故で亡くなって、私が一番懐いていた父方のおじいちゃんが引き受けてくれる事になったのだ。

でも周りの人が大反対したのを、今でもはっきりと覚えている。

当時の私にはその理由が分らなかった。いつも優しくしてくれるおじいちゃんを、なぜ皆は悪く言うのか、ずいぶん反発した物だ。

「もう大丈夫。この家に来たからには、何があっても守ってあげるからな。何の心配もいらないよ」そう言っておじいちゃんは迎えてくれた。

小さな頃から、とにかく私の味方をしてくれたおじいちゃん。困った両親がよく顔を見合わせていたつけ。

そしてそれは私と一緒に生活するようになっても変わらなかった。彼がいたからこそ私はここまで大きくなれたし、寂しさを紛らわせて生きてこられたのかもしれない。

そんなおじいちゃんも昨年亡くなった。肝臓癌だった。気付いた時にはもう手遅れだった。

私がどれ程悲嘆に暮れたか分るだろうか？

そんな感情を今も引き摺りながら、私は毎日を過ごしていた。

いつもなら私は学校に行っていて、家にはいない時間だった。でも風邪を拗らせて熱が出てしまい、私はひとりベッドでうんうんと唸っていた。

異常に喉が渴いた私が水を飲みキッチンへ下りて行くと、家中はどこも静まり返っている。

家の前は大きな幹線道路が走っていて、大型トラックなどもビュンビュン飛ばして走っているが、ほとんど音は気にならない。

買い置きしてあったお茶のペットボトルを手にしてふらふらと居間に入ると、窓からはいつものそんな光景が見えた。

その時だった。

突然のクラッシュ。

耳をつんざく轟音と共に、目の前で何台かの車を巻き込みながら、タンクローリーの車体に描かれた見慣れたメーカーのマークが大きくひしゃげた。

火の手が上がる。

中身はガソリンに違いなかった。

本当に一瞬で世界は赤くなった。私は迫り来る火の玉になす術もなく、窓の外を見詰めていた。

頭を抱えたまま顔を上げると、私は生きていた。

爆弾でも投げ込まれたかのような大きな揺さぶり、衝撃にもこの家は耐えたのだ。

窓はたくさんひびが入って真っ白になっていたが、割れてはいなかった。

それでも外が赤く燃えている様子がなんとなく窺える。

熱くなつたサツシをパジャマの一部を使って細く開けると、熱気が顔を襲つた。

……大惨事。そこにはそれしか言葉が見付からない程の光景が広がっていた。

道路に面した家々はことごとく無残な姿を晒している。なのにこの家だけはほとんど原形を留めていた。

おじいちゃんは、私を引き取るまでは、いわゆる”ヤクザ”の幹部だった。

当時、親戚が大反対したのも頷けるという物だ。

でも私の事を考えたおじいちゃんは一念発起（？）、ヤクザから足を洗つて、綺麗な身になって私を出迎えたらしい。

そんな事情を知つたのは、もちろん随分あとになってからだ。

そういう訳でこの家は必要以上に頑丈に造られていた。冗談ではなく、矢でも鉄砲でも掛かつて来なさいと言わんばかりに造られていたのだ。

「この家に来たからには、何があつても守つてあげる」おじいちゃんの言葉が蘇る。

亡くなつてもまだ、おじいちゃんは私を守ってくれた。

私は我に返り、慌てて消防に電話を掛ける。

おじいちゃんを救う事は出来なかったが、今なら私にも知識と、稚拙ながらも技術がある。

今こそ私が誰かを助ける番だと思った。

きつとおじいちゃんもそう願っているに違いない。

上着を羽織い、救急箱に役に立ちそうな物を詰め込んでから、私は扉を開けて近所の家に向かった。

盗聴失恋（前書き）

あら筋〓英語はもう忘れる寸前です。 （ 英文は正しくないかも…
…）

盗聴失恋

「Do you get fat recently?」「キミ最近太ったんじゃない?」

「No, no. You make a mistake.」「やだ、そんな事ないわよ」

「Really?」「そうかな?」

「Of course, I'm growing up.」「もちろん。私は成長したのよ」

「Hahahaha..... You're thirty years old, aren't you?」「ははは。もう三十じゃないか」

「Quiet! My heart is filled with, so my weight increased.」「黙りなさい! 心がいっぱいになったから、身体まで重くなったのよ」

「Wow, You meet a lover at last?」「ついに誰かいい人ができたのかい?」

「sure.」「そうよ」

「who?」「相手は誰?」

「Meats. You.....」「Hahahaha.....」
彼女の声は男の笑い声に掻き消されていた。

「..... meet you? あのおっさんに?」

彼女はあるおっさんが好きだっていうのか? 壁に付けていた耳を離して、僕は呆然と立ち尽くした。

彼女を訪ねて来た男の事が気になって、ずっと会話を聞いていたのだ。

隣の部屋の女の人は素敵だった。

この気持ちさえあれば言葉の壁など乗り越えられる。そうは思っ

だが、気持ちを伝える為にはしゃべれなければ話にならない。

今もすっかり頭から抜け落ちた英語を必死に勉強している最中だった。

……でもすべては終わった。

言葉も出なかった。余計な事をしないで、勉強に没頭していればよかった。そうすれば希望を失わずに済んだのに……。

僕は英語のテキストを床に投げ捨てると、ビールを取りに行こうとキッチンに足を向けた。

「Oh, Dad. Your present is the beef steak. Great!」（あら、お父さん。差し入れてステーキ肉だったの？ 最高だわ。）

「I know that you have loved a beef since you're a kid.」（お前は昔っからずっとお肉が好きじゃないか。）

「I'll give a portion of this to my neighbor.」（お隣の人にも、分けてあげようかしら？）

盗聴失恋（後書き）

（蛇足ですが、ミートは、m e e t : 会う、m e a t : お肉。単なる駄ジャレ話です。）

すっぴん様（前書き）

あら筋々じきに彼と旅行に行くというお客に、店員が勧めた商品は女心をくすぐる一品だった。

すっぴん様

「実は来週彼と旅行に行くんですけど、すっぴんを見せるのが恥ずかしいんです」

対面販売の化粧品売り場で、二十代の真ん中辺りに見える彼女はそう言つて俯いた。

「まあ、羨ましいいわ。私なんてホントに会いがなくて……」 適当に話を合わせながら、店員は彼女の顎を上げさせる。

「女ですもん、そういう不安はありますよね。」

でも大丈夫。ちょうどあなたのような方にお勧めの商品があるんです」

「どういう物？」 ちよつと訝し気な表情が訊いた。

「専用のメイク落としでしか取れない、強固な下地が作れるファンデーションです。」

つまり素肌の上に”すっぴん”を作り上げる訳ですね」

「これは私が言つたとは内緒にしてほしいんですけど……」 そう言つて彼女の耳元に顔を持つていく。「つまりインチキなすっぴんです」

目を丸くして、あははと彼女が笑う。

「これは化粧化粧してなくて、自然に、綺麗に見えますから彼にもバレませんし、きつとあなたの事を惚れ直しますよ」

そう言つて彼女の手の甲にそつとパフを当て、その後を手で擦つてやる。

「ね、取れないでしょ？」

手を光に翳しながら、彼女の顔が明るく微笑んだ。

「これください！」

「同じ特徴を備えた、本物に見える眉を書くキットもありますよ」

スキップするような足取りで彼女の背中が遠ざかつて行く。

一度使ったら、二度と人前で素肌を見せられない。末永くお使い頂ける商品だ。

彼女とは長いお付き合いになりそうだわ。

サンプルを片付けながら、店員は彼女の笑顔を思い浮かべた。

消えた夫（前書き）

あら筋〃気が付けば夫を何日も見ていない。出張だと言ってたよう
な気がするけど。

消えた夫

ここ何日も夫の姿を見ていない。

あれ？ そう言えば、いつだったか出張が入ったって言うたよ
うな気がする。

でも……。それにしても少し長すぎる気がした。せいぜい数日、
長くても一週間くらいな物だろう。

意外とそのまま失踪してたりして。なんて、あの夫にそんな事が
出来るはずがない。

加奈子とはにかく荷物が詰まっているクローゼットを開けてみた。
「いつも持つて行くバッグはどれだっけ？」

中を漁るように探してみるが、どれも違う気がする。
やっぱり出張かな？

諦めて、取り敢えず汚れた手を洗おうと洗面所兼脱衣所へ行くと、
山のような洗濯物が目に入った。

「いい加減洗濯しないと、着るものがなくなっちゃうわね」

でもよく見れば、その山は自分の服や下着ばかりで夫の物は見当
たらない。

これはいいよおかしい。

加奈子は不安になつて居間に戻り、携帯を手にとると夫に電話を
掛けてみた。でも呼び出し音が鳴るだけで一向に出る気配がない。

その時玄関のドアがかちやりと音を立てた。

加奈子がスリッパを鳴らして玄関に向かうと、こちらを向いた夫
が悲鳴を上げた。

「うわあっ！ なんだお前、起きてのか？」

夫が思わず腕時計に目をやった。「一時半だぞ」

「私起きてたからって、そんなに驚く事ないでしょ？ それより
ずっと出張だったの？」

でも彼の手にはひとつも荷物が無い。

「……」

「なんで黙ってるのよ？」

「別に……」

夫は何も答えないまま、靴を脱いで家上がった。

ぐうたらな妻は、夫が出掛ける時間に起きた試しがない。

自分で朝ご飯を用意して皿を洗い、支度して会社に出掛け、夜遅く帰ってみれば妻はもう寝ている。時間が合わないのでいつしか寝室は別々になり、最近では寝顔すら見た事がない。

もちろん着る物がなくなるので、自分で洗濯もする。

特にここの所忙しくて土日も出勤しなければならなったから、加奈子に会うのは三週間ぶりという所か……。

同じ家にいながら、”お久しぶり”もないもんだろう？

追い掛けてくる妻の視線を無視して、彼はさっさと自室へ引き上げた。

ぶんぶんモスキート（前書き）

あら筋Ⅱ 僕はとうとうお宝を見付けた。

ぶんぶんモスキート

ついに宝の山を見付けた。

これだけあれば一生食いつぱぐれる事はないはずだ。

しかし表面は思ったより固く、穴を開ける事は叶わない。

ああ、イライラする。

餌は目の前にぶら下がっているというのに。行く手を厚い壁が阻んでいる。

お預けを食らうのはいつもの事。でもかぐわしい香りを嗅いだだけでは腹は膨れない。

危険を承知で何度もアタックした。もちろんそれだけの価値があったからだ。

「何してるの！」

M・A・Pを床に落とした新人看護師は叱責されて、すかさず謝った。

「すみません、手元が狂ってしまっ

「初めてで緊張するのは分かるけど、慌てる必要はないから、丁寧にやりなさい」

「はい」

しかしフックに引っ掛けたM・A・Pの先にチューブを取り付ける際、今度は中身が飛び出してしまう。

飛び散った赤い血液が、不運にも羽を濡らした。

「しまった」そう思った時には落下し始めていた。

しかもその先には、出来たばかりの大きな血溜まりが待っていた。

「ああ、これは夢か幻か」肉林はないが、酒池はある。

気が付けば、一生掛かっても食べ切れない程のご馳走が身体を包んでいた。

もがきながらも一生懸命に吸い込んだ。
でもいくらうまくても、お腹に入れられる量には限度がある。

「ちょっと！ 一体学校で何を習ってきたの！！」
思わず後ず去った看護師の右足は、血溜まりの中にあつた。
プチッ。

その瞬間モスキートの一生は幕を閉じた。
しかし夢のような体験をしたカレは、きつとどの仲間よりも幸せ
な最期だったに違いない。

ぶんぶんモスキート（後書き）

M・A・P 赤血球輸血パック。モスキート 〓 もちろん蚊の事です。

私のすべて（前書き）

あら筋〓彼は私のすべてを奪って逃走した。

私のすべて

「誰か、その男を捕まえて下さい！！」女性の声が上がった。

ジャケット姿の男が人の間を擦り抜けるようにして走り去って行く。しかしその手には何も持っていないように見えた。

「どの男ですか？」気付いた通行人が、辺りを見回す。

しかし近くの角を曲がった男の姿は、すでに見えなくなっていた。「何を盗られたんです？」追い掛けようとして見失った男性が、女性の元にやって来た。

「全部です」

「全部？」

「私のすべてを盗んで行っただんです」

「すべてを？」要領を得ない話しに彼は戸惑った。

「警察に届けますか？ あなた、あの人の事知ってるでしょ？」

「え？ し、知りませんよ」

「本当に？」その顔には知っていると書いてある。

「……実は婚約者なんです」数秒の沈黙の後、彼女は仕方なさそうに口を開いた。

「ちよつととうとうとしている間に勝手に持ち出されちゃって、気が付いた私がかれの顔を見たら、慌てて逃げて行っただんです」

彼女はシャツの裾を持ち上げると、くびれの辺りをちらりと見せた。

「ああ、そういう事ですか。でもその人は何を見ただんです？ 別に逃げなくてもよさそうなもんじゃないですか。心当たりはないんですか？」

「それは……」

三度の結婚と離婚。不良少女を絵に描いたような学生時代。子供の頃はいじめっ子だった。

「……言えません」

なるほど。

「じゃあ、私はこれで」

すべてを悟ったように男性は消えて行った。

再び彼女がシャツを持ち上げると、そこには四角い端子が見えた。

普段は蓋がしてあるが、外れたままの姿で家を飛び出していた。

カレはここからすべてを吸い出した。

私の過去のすべてを。

せつかく婚約まで漕ぎ着けたのに、何もかもお仕舞いだった。

彼女はその場にしゃがみ込んで泣き始めた。しかしアンドロイドに涙は流せなかった。

僕のすべて（前書き）

あら筋〓街を彷徨う三上は、ひとつの看板に目を留めた。

僕のすべて

三上はふらふらと街を彷徨っていた。手元には一円の金もない。腹が減った。屋根のある場所が恋しかった。

ふと看板を見上げると、”お売り下さい。何でも買います！”の文字が踊っている。

「高価買取……か」

彼は覚悟を決めてその敷居を跨ぐ事にした。

「いらつしやいませ。本日はどのような物を？」

にこやかな店員に、三上は顔を近付けて耳打ちする。

「ははあ。ではここではなんですから、奥の方へいらして下さい」

店員のあとについて行くと、狭い小部屋に案内された。

「で？ どこをお売り頂けるんです？」

店員と小さなテーブルに向かい合って座ると、そこには人体図が置かれていた。

「ええと、二つある物がいいんですけど……」

「腎臓はどうです？ 今なら五万円で買い取りますよ」

「たった五万円？」

「皆さんそうおっしゃられるんですが、あなた入院費用とか出せるんですか？」

「いえ、それは……」自然と語尾は小さくなってしまふ。

「でしょ？ これは入院、検査、手術費用、全部込みの値段なんです」

「じゃあ、肝臓は？」

「乱暴ですねえ。仮に半分貰うとして、やっぱり五万円で所でしょうか」

「ええ？ もう少し何かならないんですか？」

「両方いつペンなら、それぞれ五割増しにしますよ」
うーん。

「ちなみに心臓はいくらなんです？」

「それは生きている人から買う事はないんで、値段の付けようがないですね」

痛い思いをしても、せいぜいふた月三月食い繋げる程度の金にしかならないのか……。

最後の手段を使っただけでは、とても未来に展望は開けなかった。なんで俺だけがこんな目に……。

突然怒りが込み上げてきた三上は、思わずこう叫んでいた。

「じゃあ、全部買ってくれ！」

「全部？」

「俺を丸ごと買ってくれ！」

「いや、それは……」

「いくらになるんだ!!」

店員は声を荒げる客の剣幕に押されて身体を引いた。

「さ、三百円です」

気が付けば、三上は椅子ごと床に転がっていた。

三百円？ 俺の価値はそれっぽっちゃかよ。

大失言（前書き）

あら筋Ⅱ 岡村大臣は失言してしまった。

大失言

「大臣、何であんな発言をしたんですか？」

「恥ずかしいと思わないですか？ 仮にも現職の大臣なんですよ」

「国民の感情を考えての発言なんですか？」

次々と突き付けられるマイク、マイク、マイク。

群がるマスコミに揉みくちやにされながら、岡村大臣は顔を背けて車に乗り込んだ。

盛んにフラッシュが焚かれる。

どこからか聞こえる、「バカ野郎！」の声。

しかし車は何も語らず、そのまま走り去った。

”こちら首相官邸前です。岡村大臣の発言に関して、首相にも説明を求める声が上がっています。当然任命責任の問題にも発展するでしょう。”

官邸前は大混乱に陥っていた。その様子はもちろんテレビで全国に放送されている。

「まったく何考えてやがるんだ」

「子供じゃないんだから」

街頭でのインタビューに答える市民の声は一樣に批判的だった。

その日の夜。あまりの凄まじい抗議の嵐に、首相は早々に大臣の罷免を決めた。

「素早い対応じゃないか」

「当然だろ」

それは歓迎ムードが起こる程の反応だった。

ついにマイクの前に立たされる事になった”元”大臣。

「では発言の真意を語って頂きましょう」

もう逃げる事は出来ない。

それでも岡村元大臣は言葉を濁した。

曰く、「明日になったら包み隠さずすべてをお話します」と。

翌日夕刻……。

国会、官邸、警察や主要な放送局までが、蜂起した一部の自衛隊員によって占拠されていた。

何も決められない政府など不要だ。

そう叫ぶ彼らに、政府の閣僚メンバー全員が拘束されていた。

銃を突き付けられた彼らに発言は許されない。互いに顔を見合わせながら、自分達の命運を祈るしかなかった。

岡村は逃げたのだ。

ひとり今日のクーデターを察知した彼は、わざと失言を発して巻き込まれまいと逃げた。

もちろん彼は首謀者ではない。単なる臆病者だった。勇氣ある男なら、辞める事なく対峙する道を選んだ事だろう。

最早失言の内容など誰も気に留めやしない。

安全な場所に身を隠した彼は、暖かい炬燵で足を伸ばしながら、その様子をテレビで眺めていた。

命あつての物種だ。返り咲く事など容易い^{たやす}い^すのだから……。

金魚救い（前書き）

あら筋Ⅱ 定番の展開はいやです。

金魚救い

「お帰りなさい、パパ」

家に帰り着くと、娘が玄関のドアを開けてくれた。

「ただいま」

勇樹が靴を脱いでスリッパを突っ掛けるなり、優が足元に纏わり付いてくる。

「さっきママとお祭りに行って来たんだよ」

ああ、そうだった。本当は一緒に行くはずだったのに、急に仕事が入って行けなかったのだ。

「そうか、何したんだ？」

居間に入ると妻が夕飯の支度の真っ最中だった。

「うーんとね、綿飴買って、金魚掬いもしたよ」

お祭りなんてどこに行っても変わらない物なんだな。優はここに引越して来てから初めてのお祭りだった。

勇樹は盆踊りの櫓を囲んで、夜店が並んでいる光景を思い浮かべる。

「金魚は何匹掬えた？」

「五匹いー」優が片手を開いて見せる。

「すごいじゃないか。それだけ獲れば立派なもんだ。あとで見せてよ」

「いいよー」

そこへ妻が口を挟んでくる。

「あなた、先にお風呂に入っちゃう？ まだご飯出来ないのよ」

「ああ、そうなの。もう入れるのか？」

「ただだけど、すぐに沸くから……。優、ちよっとお風呂のスイツチ入れて」

先日やり方を覚えたばかりの娘は、頼まれるのを待ち構えていた。
「はい。やるやる」

先生に差されたように手を上げて、台所にある端末に向かって走って行く。

ピッ、ピッと何度か電子音がした後、風呂場の方で追い炊きの始まる音がした。

「はい、ありがと」

勇樹がスーツを着替えに寝室に行こうとすると、手を止めた妻があとをついて来た。

優がテレビを点けたらしく、賑やかな音楽が聞こえてくる。

「日曜なのにご苦労様ね」

「まあ、こういう日もあるさ。ここの祭りは賑やかだった？」

「そうね、この辺じゃ一番規模が大きいらしいわよ」

普段着に着替えようか迷っていると、廊下から「お風呂が沸きました」と音声知らせてくれた。

いいタイミングだ。

シャツにパンツの出で立ちのまま、勇樹は渡された新しい下着を持って風呂場に向かった。

「ぎゃあああああつ」

それはテレビに夢中になっていた優ですら振り向く程の声だった。

「ああつ！ そうだつ！！」すぐに優も負けず劣らず大きな声を上げる。「金魚さん達、お風呂の中だった！」

「あなた、どうしたの？」

妻に続いて優までが顔を見せた。

「お湯が熱いんだよ。一体何度に設定したんだ？」

「パパ、金魚さんは？ そこにいるでしょ？」娘が靴下が濡れるのも構わず、中に入って湯船を覗き込む。

「あれ？ 元気だ……」

確かにもうもうと湯気を上げる湯船の中で、金魚は悠々と泳ぎ回っていた。

すかさず手を入れようとする娘の腕を掴んで止める。

「今の技術つてすごいわね」

妻が掬った金魚を入れてあつた小さな袋をこちらに見せた。

”本品はストレスにも強い、耐熱加工金魚です。” 袋の右下にはそんな文字が印刷されていた。

「店のおじさん、こいつらは長生きするよって言ってたもんね」

あーんして（前書き）

あら筋々 貴美子は子供のような夫に愛想が尽きた。

あーんして

「では、旦那さんは以前から自殺したいから協力してほしいと、妻であるあなたにそう頼んでいたんですね？」刑事のひとりが同じ事をもう一度繰り返した。

「ええ、一人じゃ怖くて出来ないからって。もちろんそんな事は考えないでって言いました」

貴美子は目を潤ませながら弁解した。

小さなモニタで再生されている監視カメラの映像には、夫が手にした小瓶から粉が振り掛けられる様子が流れている。

「まさか、あの粉が毒だったなんて……」バッグから取り出したハンカチで目元を押さえた。「レストランでの食事の最中に死のうとするなんて、誰も思わないじゃないですか」

「それはそうですね……。何か心当たりがあるようですね？」

「実は夫の後輩が設立した会社に、ウチの会社が呑み込まれようとしているんです。それまで随分目を掛けてやったのに、恩を仇で返すような真似をして」

貴美子の表情が悔しさに歪んだ。

「確かにこの所業績は落ち込んでいましたけど、まだまだウチの方が実力があるんです。それなのにこの際買収された方が楽になれるんじゃないかって、そんな事を言うんですよ。」

夫は父親から引き継いだ会社の名前を残したかったはずですが、相手の強引なやり方に困り果てていました」

「はい、あーん」

貴美子はフォークに刺さった肉を旦那の口に放り込んだ。

「うん、うまい」

「……」夫の無邪気な顔を見るとげんなりする。

「あのさ……」

「ん？」

「そろそろこういうの止めにしない？」

「こついうのって？」

そりゃ、ここは個室だから人目を気にする必要はないけどね……。今日は定休日だったが、毎年結婚記念日はここで決めていたの
で、お得意様の威光を以て特別に店を開けて貰っていた。

つまり客は自分達ふたりだけしかいなかった。

ともかく夫はいつも料理の最初のひと口目を人に食べさせて貰わないと気が済まない。

結婚当初はそれでもいいと思っていたが、いい加減この歳になってもそのままでは、誰だって勘弁してほしいと思うだろう。

しかも口に入れた物はさつさと呑み込んで、味わうって事を知らない。

貴美子は邪気のない顔でもぐもぐと口を動かすこの男と席を共にする事すら我慢ならなかった。しかし今日ばかりは仕方ない。

「ねえ、デザートは特別にパフェにして貰ったんだけど……」夫は甘い物にも目がなかった。

「これ、トッピングすると美味しくなるんだって」

そう言つて小さな小瓶を手渡した。

「何だい、これ？」

「ひ、み、つ。すごい刺激的な味に変わるっていうのよ」

「へえ」

言つてる傍から、顔見知りのウェイターが二つのパフェを運んできた。

早速彼が蓋を開けてパフェに粉を振り掛けている。

「何か独特な香りがするね」

「そりゃそうよ。それ、あの男に使つ為に購入した毒薬だもの」

「え？ お前、本気だったのか？」

「あなたこそ、このまま大人しく引き下がるつもりだったの？　こ
うまでコケにされてよく黙っていられるわね？」

「いや、でも争いは好まない性質たちなんですね」

「そう……、残念だね。いい加減、あなたのその軟弱さには愛想が
尽きたわ」

「ちよつと待てよ……」

夫が話しを続けようとした所へ、貴美子は最初のひと口をスプー
ンで掬って旦那に向けた。

「はい、あーん」

前触れもなく差し出されたそれを彼はぱくりと口にする。そして
そのまま喉を鳴らして呑み込んだ。

「あつ……」夫がしまったという顔をしたが、もう遅い。

習慣とは恐ろしい物だ。何も考えずにほとんど条件反射で身体が
動く。

「お前……」喉を掻き毟る夫に、悲鳴を上げながら駆け寄る貴美子。
「どうしたの？　あなた？　あなた？」

騒ぎに気付いたウェイターも顔を出した。

「どうされたんですか？」

「夫が突然苦しみだして……」

二人ですっかり生気を失った彼の身体を揺すり続ける。

「あなた、しっかりしてっ！」

監視カメラの映像は夫が粉を振り掛ける所から始まっていた。も
ちろん音声などない。

二代目のボンボンは、およそ気概という物に欠けていた。

結婚した途端に義父が亡くなり、夫が後を継いで社長に収まった
物の、会社はじきに傾き始めた。所詮器ではなかったのだ。

結局、今では例の後輩に買収された方がマシな状況になっていた。

それでも夫には危機感の欠片もない。

貴美子は、甘えん坊で、まるで大きな子供のような彼にうんざりしていた。

それでも社長になった当初はそれなりに豊かな生活が出来たので何とか耐えていたが、ここに至ればそれも限界だった。

ウェイターのカレと示し合わせた計画はうまくいきそうだ。

会社は後輩にくれてやろう。その代り親会社の株を貰い受け、配当を受け取ろうと考えた。当分の間は生命保険だけでも暮らしている。

そしてほとぼりが冷めたらカレと一緒になればいい。

貴美子は心の中で舌を出しながら、刑事の前でさめざめと泣き伏した。

お悩み相談室（前書き）

あら筋Ⅱ 相談員は多くの悩みを抱える男性の相談を受けた。

お悩み相談室

「すみません。相続問題、子供の問題、夫婦生活の問題。とにかく困り事があり過ぎて、どうにもならないんです」

電話の向こうにいる男性は憔悴しきつたように言葉を吐き出した。
「まずは問題をひとつひとつ整理していきましょうよ。一度にすべてを解決するのは難しいですからね」

「それは分かっているんですが……」

「まあまあ、まずは基本的な事をお聞かせください」

相談員は焦る相手を宥めて、落ち着かせようと少し間を取った。

「では、あなたはお幾つですか？」

「え？ 私？」

「あなた以外の誰の年齢を尋ねるというんです？」

「はあ……、五十三です」

「もちろん働いていらっしゃいますよね」

「ええ」

「ご家族の構成は？」

「妻と大学生になる息子、それに高校生の娘がいます。あと、家には自分の両親が同居しています」

「うんうん、なるほど。夫婦仲は如何です？」

「ええと、これが自分で言うのも恥ずかしいんですが、近所でも評判のおしどり夫婦なんですよ」

「そうなんですか、それは何よりですね。子供さんとの関係はどうです？」

「これがまたいい子達でね。しかもどうして頭のよくないウチらみたいのから、こんな秀才が生まれたのかっていう程勉強が出来るんですよ」

「ほほう、ご自慢のお子さん達なんですね？」

相談員は、家族の中にどんな蟠りがあるのか見付け出そうと次の

質問を考える。

「聞いてますと、ご家族皆仲良くされているように思いますが、でも夫婦生活はうまくいってないんですか？」

「やだなあ、この歳でそんなにがつつきません」

「え？ では、お子さんの問題というのは？」

「別にありませんが……」

「……」

電話線を無言の信号が行き交った。

「あなたはふざけてるんですか？ ここは悩み事を相談する窓口なんですよ。あなたのように幸せな方の自慢話を聞く所じゃあない」
さつきまで真剣に話を訊いていた彼の口調は明らかにとんがっていた。

「いや、あなたの訊き出し方がうまいから、つい乗せられちゃって

……」

「褒めたって何も出ません」

「職業をちゃんと訊いて貰えば、そこから話を広げようと思ったんですよ」

思わぬ反撃に、相談員はちょっと反省した。

「ほう？ 職業を、ね。で、何をされてるんです？」

「あの……、実はこことは別のお悩み相談室で相談を受けてるんです。」

転職したばかりで、相続問題とか、子供や夫婦生活の問題なんかのいいアドバイスが出来なくて困ってるんです……」

丸投げかよ……。相談員は思わず受話器を見詰めた。

チキンレース（前書き）

あら筋〃どこからか聞こえてきた男の言葉に彼女達は足を止めた。

チキンレース

そこは大勢の人々が行き交っていた。

「お前、歳サバよんでるだろ？」

どこからか聞こえてきた男の声に、複数の女性がぎくりと足を止めた。

「顔も整形してるって聞いたぞ」

その内の何人かが、ほっとした表情を浮かべて歩き始める。

男の声は不思議とよく通った。

「しかも噂じゃ、不倫までしてるっていうじゃないか……」

立ち止まっていた数人が、まるで呪縛が解けたかのように足早に消えて行く。

ああ、よかった。自分の事じゃなかった……。安堵したどの顔にも微笑みが戻っていた。

それでも残ってしまった五人の女性が、その場に硬直したように立ち竦んでいる。

握り締めた拳は小刻みに震え、こめかみの辺りからひと筋の汗が流れ落ちた。

彼女達は俯いたまま、耳を澄ませて次の台詞が投げ掛けられるのを待った。

互いにちらちらと視線を走らせながら、最後まで残りたくないという心理だけが心に渦巻いている。

指摘されたらマズイ自分の弱点を反芻しては、それ以外の点が名指しされる事を祈った。

早く言って！ 次の……、次の言葉は何？

しかしいつまで経っても”次”は来ない。

いい加減耐え切れなくなった五人は一斉に顔を上げた。

するとそこにあったのは、自分達に注がれる、行き交う人々の好

奇の目、目、目。

最早これ以上のチキンレースは無意味だった。

一瞬で状況を悟った五人は慌てふためいて、散り散りに走り出す。あつという間に人ごみの中へ消えて行った彼女達が残した物は、何かと順位を付けたがる人間の性だった。

半年後の幽霊（前書き）

あら筋〃いつもの朝の光景。しかし何かが違っていた。

半年後の幽霊

「ねえ、お母さん、夜あたしの部屋に入ったでしょ？」

千秋は朝から膨れっ面だった。

「寝てる間につて事？」

包丁の手を止めた母親が後ろを振り返る。

「そうよ。勝手に入らないでって言ってるじゃない。しかも机の上に教科書とか広げてあつてさ、嫌味な訳？」

「そんな事する訳ないでしょ？　そもそもあんたの方が遅くまで起きてたでしょうが」

「じゃあ、誰がやったっていうのよ？」

「知らないわよ。千秋がやり掛けのまま寝たんじゃないの？」

「あり得ない！」

ぷりぷりと怒ったまま椅子を引いた千秋は、テーブルに用意されていたトーストにがぶりと噛り付いた。

「まったくどうなってるのよ」

ハムエッグを突きながら、ぶつぶつと文句を垂れる。

「それよりあんた、冷蔵庫にあったチーズ食べちゃったでしょ。夜中に何か食べるとまた太るわよ」

千秋は今度こそ力チンときた。

「あたしじゃないわよ。ダイエット頑張ってるんだから、隠れて食べやしないわ！」

「だって、お父さんは食べるはずないし……」

パンを飲み込み、皿をあつという間に空にした千秋は、目を三角にしたままダイニングを出て行った。

入れ違いに入って来た父親が、「何怒ってるんだ？」と娘の背中に声を掛けたが、もちろん返事など返ってこない。

「ちよつと千秋、お兄ちゃん起こして来て」

「絶対イヤ！」

” こちらは事件から半年経った事件現場です。家の周囲には未だに規制線の黄色いテープが張られ、どうやら警察の管理下に置かれているようです。”

リポーターはそう言っただけで背後に手を翳した。

” 大人しかつたという長男が起こした凄惨な殺人事件で、家族三人が殺害されたこの家からは、時々物音や人の声が聞こえると近所の人は言います。”

「……！」そこでマイクを手にした彼は突然沈黙して、青褪めた。

” い、今、何か聞こえませんでしたか？ いやとか、何とか……。

”

「何か、朝っぱらから騒がしいわね」母親は家の前のざわつきを感じて呟いた。

「お母さん、大変。外にいっぱい人が集まってるよ」

いつの間にか戻って来た千秋が、窓の外を指さしている。

「キヤーっ！！」

何事かと、父親も加わって、玄関扉を開けた三人が顔を出すと、集まった人々から一斉に悲鳴が上がった。

表札を隠し、規制線のテープを隣の家から勝手に移し替えたのは、怖い物知らずの近所のガキ共であった。

泣いた者勝ち（前書き）

あら筋〃居酒屋で向かい合う智樹と希美。彼女はおもむろに口を開いた。

泣いた者勝ち

「私達付き合ってもう三年も経つわよね？」希美は、^{のぞみ}”も”の所に特に力を込めた。

「そう？　もうそんなになるかな？」

居酒屋の座敷テーブルで向かい合うふたり。

枝豆を口にした智樹が顔を上げると、彼女の瞳は今にも泣き出しそうに潤んでいた。

これはマズい……。智樹はすかさず顔を戻す。

「でね、私も色々考えたんだけど、そろそろいいかなあって……」

「そろそろって、何が？」

智樹がすっ恍けると、彼女の手にあつたビールの中ジョッキが、叩き付けられるようにドンと置かれた。

瞬間、驚いた両隣の客の視線がこちらに向く。

「おいおい、他の人に迷惑だろう？　静かにおけよ」宥めるように優しい声を掛けた時には、その目から涙が溢れ出していた。

「もういいわよ。いつだってあなたはそうやってはぐらかすんだから」

やれやれ……。そう思いつつも、智樹はポケットの中の箱を思い浮かべる。

「……だから私、お見合いしたの」

「へ？」

まさに青天の霹靂。思わず出た声は上擦っていた。

「ちょ、ちょっと待てよ、そんな事ひと言も言わなかったじゃないか」

慌てる智樹をよそに、希美は泣きながら言葉を続ける。

「あなたには申し訳ないけど、これがいい人で……。どうして今まで独りだったのかっていうくらい素敵な人だったのよ」

智樹の目は点になっていた。

「本当にひと目惚れだったの。でね、あなたとは今日でお別れしようと思って……」

持ち上げたジョッキはそのまま空中で止まった。

「別れるって、そんな……」

希美はハンカチを目に当てながらぼろぼろと涙を流す。やがてしやくり上げるように肩を震わせながら両手で顔を塞いでしまった。

興味津々という感じで、先程の客の視線がちらちらと彷徨い、途絶えたままの会話から耳がダンボになっているのが分かる。

智樹は口をつけないまま、静かにジョッキを戻した。

呆然自失。

しかもこれじゃあまるで智樹の方が泣かしているみたいじゃないか。

右手をポケットにつつこんだ智樹は、いつ渡そうかと機会を窺っていた、婚約指輪の箱を掌で弄もてあそんだ。

何で振った希美が号泣してて、振られた自分が口を開けてそれを見詰めているのか？

本当に泣きたいのはこちらの方だった。

でもその理由は至極簡単だ。

彼女は別に悲しくて泣いている訳じゃない。

酒がある量を超えると決まって泣き始めるのだ。つまり単なる泣き上戸だった。

智樹は希美の前に置かれた空のジョッキ達を眺めながら、都合よく涙の出る彼女の身体を羨んだ。

テレビショッピング（前書き）

あら筋〓テレビを点けると、ショッピング番組が流れていた。

テレビショッピング

十二時を回って帰宅した。

しんとした室内にテレビを点けて音を満たす。

”今年のクリスマスプレゼントにお子さんそっくりの人体模型は如何ですか？

人体の仕組みを学ぶ事は勿論、災害時には目が光って非常用ライトに早変わり。

お子さんそっくりに仕上げますので、愛着が湧いて手放せなくなります。”

”これ、もしかして高田さんのお子さんですか？”

司会の高田が隣に立つ、模型の頭を撫でながら答える。

”そうですね。一足先に作って貰っちゃいました。かわいいでしょう？”

”え、ええ……すごく……。”

”そしてここ、ここをご覧ください。通常はオプションの二足歩行キットが何と今回標準装備！

深夜、家の中をランダムに徘徊する事も可能なんです。そう、家の中でお化け屋敷が体験出来るんですよ。

深夜トイレに起きて出くわせば、悲鳴を上げる事間違いないし。”

”きやー！”

”パソコンに接続して、行動を設定する事も出来ます。つまりロボットの勉強としても最適。

最高のエンターテイメントをご満喫頂きつつ、電子工学を学ぶ事も出来ます。

さあ、こんなお得なこの人体模型。今ご購入頂くと、もれなくもう一体プレゼント。

お写真をお送り頂ければ、模型のお顔は職人が手作りで一体一体

丁寧に仕上げます。”

”わあ、機能満載で、すごいお買い得感ですね。これならお子様も大喜び。”

”先着百名様限定。さあ、そのお値段は……”

ついつい足を止めて見入ってしまったが、闇に佇むソレを想像し
て思わず身震いする。

こんな物誰が欲しがるんだ……。

「怖過ぎるだろ……」

こんな物誰が欲しがるのかって？

どんな物でも勢いに任せて電話してしまう人はいるものさ。

ほら、電話がひっきりなしに鳴っている。

怖いね、こういう心理。

不親切の親切（前書き）

あら筋〓今日もひとりきりの夜。ツマミはこれにしようか。

不親切の親切

ピーッ、ピーッ。アラームが鳴った。

「お、出来たか」

” 解凍に失敗してしまいました。”

いそいそとキッチンに向かうと、これが専門のくせに仕事をミスったと告げやがった。

「おいおい、何失敗してんだよ。そりゃ今日のは安いやつだけどさ」レンジの扉を手前に引くと、どうすればこうなるのか、皿の上で凍っていたはずのそれが肉汁を溢れ出させて無残な姿を晒している。「ちえ、酒のツマミにせっかく買つて来たのによ、まったく……」

どうにかして食えないかと頭を巡らせながら皿と向かい合った末、そう言えば”お任せモード”とやらがあつたのを思い出し、再びレンジに戻してスイッチを押した。

”お任せ下さい。”さっきの失態を謝りもせずに、ぬけぬけとこんなメッセージをのたいやがる。

「今度はちゃんとやれよな……」

お任せなのでどうなるのか分からないが、時間は残り五分と表示されていた。

取り敢えず残っていた柿ピーを戸棚から取り出して、缶ビールのブルトップに指を掛けながら居間の炬燵に潜り込んだ。

ピーッ、ピーッ。点けっぱなしのテレビを見ると、再びアラームが鳴る。

「どうなったかな？」

先程から何やらジュージュー音がして、焼けるような匂いが漂ってくる不思議を思いながら待っていた。

扉を開けると、肉が炙られたいい匂いが溢れ出す。

ちよいとひと切れ指で摘み出すと、やはり表面が焼けていた。

「オーブンレンジだったのか、こいつ……」
そのまま口に運ぶと実に旨かった。「へえ、どうなってんだかな？」

まあ、それはさて置き、せっかくだから熱い内に戴くでしょう。
今度は皿ごとそれを取り出すと、彼は再び居間に向かった。

さて、このレンジは時々ワザと失敗するように作られている。
しかも高価な材料では失敗しないよう、高度な認識技術が使われているのだ。

実は取説にさえ書かれていない秘密の機能も色々と詰め込まれている。

食材をダメにされれば愚痴が出る。思わず悪態をついてしまうだろうし、声を出す事もあるだろう。

感情が動く。何とかしようと、いつもと違う部分の頭も使う。

これは単身者の為に作られた代物だ。

声を出す事なく一日を過ごしてしまうような人の為に開発された白物なのだ。

だから操作は簡単。

でも、ちょっとした不親切が使用者を動かすように……。そんな
思いを込めて、隠れた親切心が詰め込まれている。

上を向いて（前書き）

あら筋々彼との二回目のデート。その彼に身体を預けた瑠璃の身体は震えていた。

上を向いて

「すごいね。ここでこんなにたくさん見えるのは今日だけだね、きつと」

「そうだね」

翔に肩を抱かれた瑠璃るりは手摺から手を離さずにそつと身体を預けた。

夜空には満点の星。新月で月明かりすらない今日は、普段なら見る事の出来ない暗い光まで目に届いている。

風はなく、昼間南風が吹き込んだお蔭で、日が暮れてずいぶん経つはずの今でも寒くはなかった。

それでも瑠璃の身体は震えている。

翔と二回目のデート。前回とは違って、ぎこちなかった会話も普段通りに戻った。

映画を観て、マックでお昼。そしてウィンドウショッピング。

手を繋いでぶらぶらと歩きながら、服やアクセサリーの店を覗いて時間を過ごした。

そして暗くなった所で、翔の秘密の場所だというビルの屋上へ行く事になる。

今いるここがそうだ。

大した高さではないそのビルはしかし、街の外れの小高い坂の上に建っていて、私達の住むこの街を一望する事が出来るという。

確かにそれは嘘じゃなかった。

さすがに地方都市であるこの街の夜景は雑誌で見た摩天楼のそれとは程遠かったが、十分に美しかった。いや、彼と一緒に見られれば、百万ドル以上の価値があった。

しかもふたりきりだ。勝手に入り込んだこんな場所に、もちろん人目などない。

二回目のデートでキスは早いかな？ いやが上にも鼓動は高鳴っ

てしまう。

どきどきが止まらない自分を隠しながら、瑠璃はちらりと彼に目をやった。

足元から吹き上がった風がふたりの背中を撫で、そのまま瑠璃の長い髪の中に入ってふわりと膨らませた。
踵の後ろには床がない。

彼は瑠璃よりも震えていた。瑠璃のどきどきも、今は別のどきどきに代わっている。

地震が来たのだ。

ふたりの唇がまさに触れる寸前だった。

大きかったそれはふたりを振り落す事こそなかったが、ビルはそのほとんどが崩落してしまった。

残ったのは掴んでいる手摺を含めたビルの一面だけで、まるで壁が地面から突き出ているような状態だった。

街の電気は消えてしまい、周囲は真っ暗。

目が慣れるまで動かなかったのは正解だったが、自分達の置かれた状況を知るに付け、恐怖が身体を突き抜けた。

……下を見ちゃいけない。

そうしてふたりは空を見上げた。満天の星々を見上げた。

上を向いて（後書き）

このストーリーはあくまでフィクションのお話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5866w/>

ぷによショート

2011年12月27日19時46分発行